丹波八木城跡小考

引原茂治

1．はじめに

丹波八木城跡は、京都府船井郡八木町と亀岡市の境に位置する城山の一帯に所在する。室町時代の丹波守護代内藤氏の居城として知られている。また、戦国期のキリシタン武将内藤ジョアンゆかりの城跡として、京都府下に数ある中世城館跡のなかでも最も知名度の高いものの一つである。標高約330mの山頂に主郭を置き、派生する尾根に郭を設け、全山を要塞化した大規模な山城跡である。なお、これまでは単に「八木城跡」・「八木城」と称してきたが、八木という地名は全国的に分布しており、隣県の兵庫県養父郡八鹿町には但馬八木城跡とも言うべき国指定史跡八木城跡があるので、混同を避けるため旧国名「丹波」を冠する。

室町時代の明徳3(1392)年に、細川頼元が丹波守護に任じられ、以後、丹波は細川氏の領国となる。細川氏が丹波守護になった当初は、小笠原・細川・香西氏が交替して守護代になっていた。永享3(1431)年に内藤備前入道が守護代に任じられて以後、一時的に上原氏が守護代になった時期があるものの、内藤氏が守護代を世襲した。在京の守護細川氏に代って実質的に丹波の支配にあたる。この内藤氏の居城であり、丹波の中核的な軍事拠点が丹波八木城である。しかし、その築城時期は不明と言うしかない。

戦国期も後半になると、丹波では在地勢力の荻野氏・波多野氏などが台頭し、内藤氏は実質的な丹波の支配者ではなくなる。その勢力範囲も船井・桑田両郡の周辺に限られ、丹波守護代も名目的なものとなる。全国的には、織田信長が台頭し、その配下の明智光秀が丹波に侵攻してくる。このような状況の中で内藤氏の丹波八木城は落城し、内藤氏はその地位を追われる。落城時期については諸説があるが、ほぼ天正6(1578)年もしくは天正7(1579)年頃と考えられる。丹波平定後は、明智光秀が支配するところとなり、南丹波支配の拠点は、光秀が築城した丹波亀山城(現亀岡市)に移る。丹波八木城については、以後も廃城にならず、光秀配下の明智左馬助が入ったとされる。

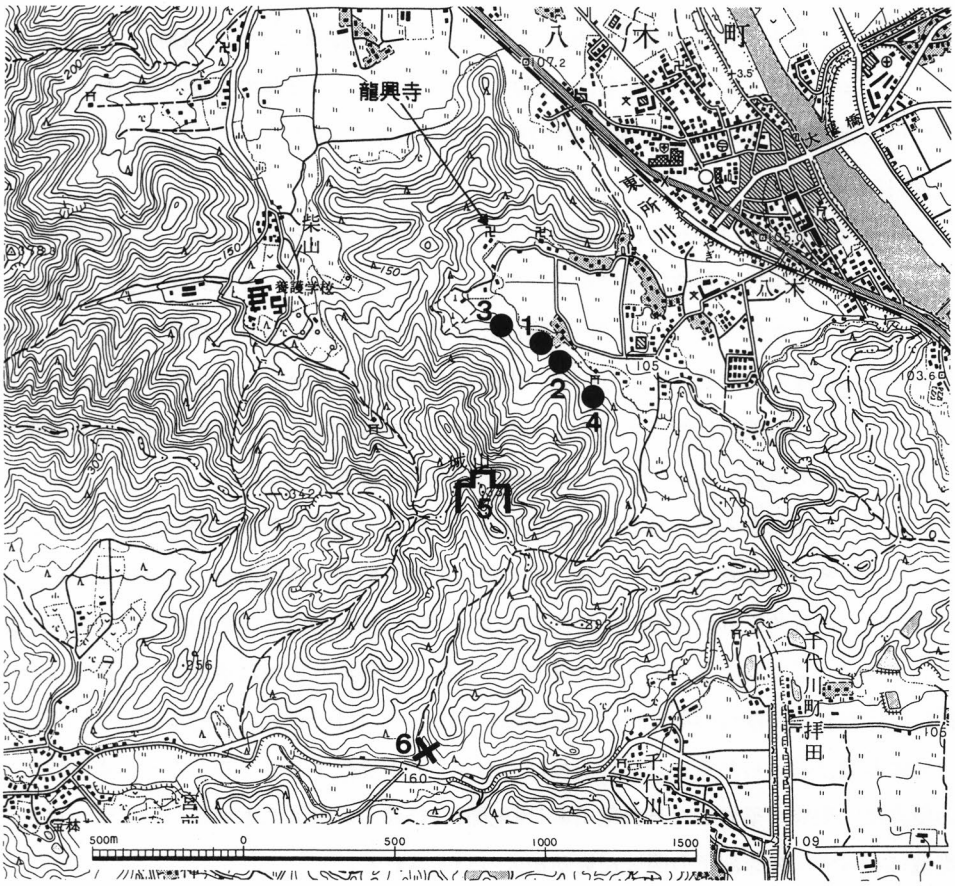
２．発掘調査の概略

丹波八木城跡の発掘調査は、京都縦貫自動車道建設に伴うもので、1991年から1993年まで３年度にわたって実施した。(注1) 調査地は、城山の北東麓部分で、八木町本郷地区にあたる。尾根の先端部や谷部には、人工的に造成されたとみられる段々状地形がみとめられる。それらの地点について試掘を行い、その結果をもとに順次本調査を実施した。なお、各地点の番号については、調査時に便宜的に付したものを小文でも使用する。

①第７地点

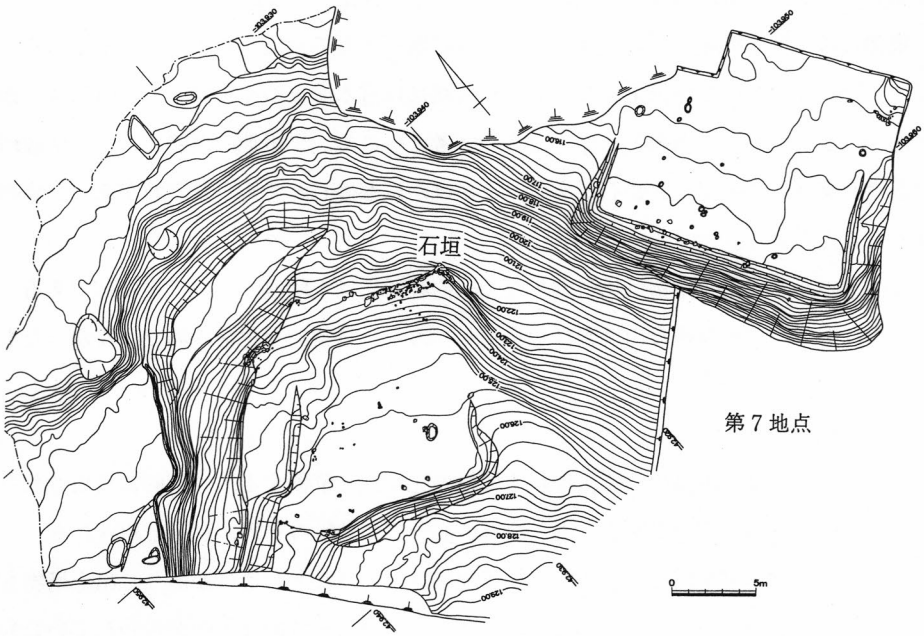
城山頂部から北側に伸びる尾根の先端部に位置する。ここでは、尾根の背や腹を岩盤まで削り出し、前面に盛土して造成した段々状の平坦地を検出した。調査地外のさらに高い部分にも数段の平坦地がある。

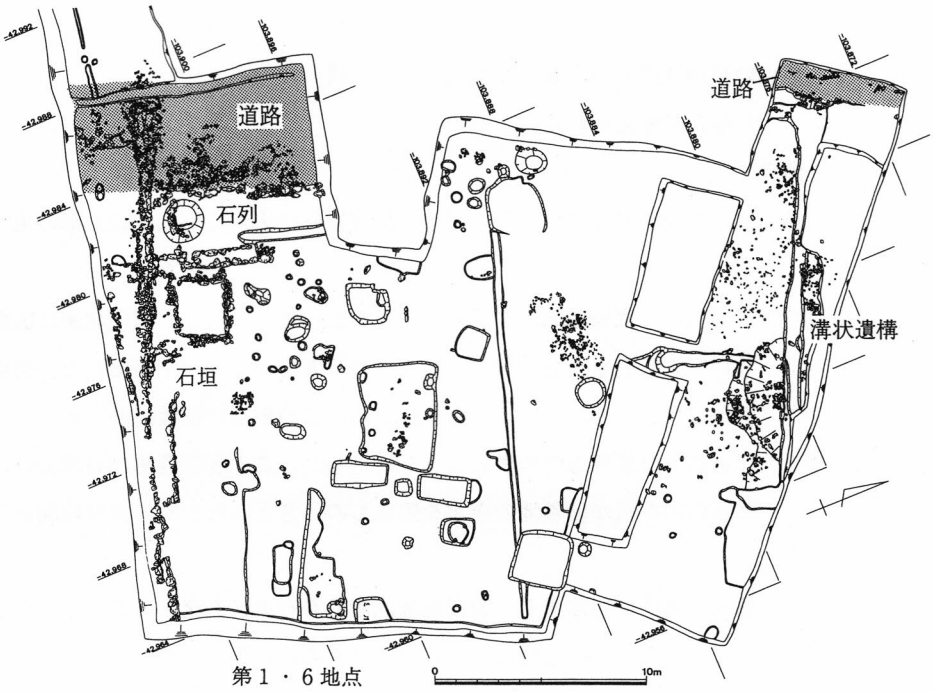
調査地内での最上部の平坦地では礎石状の石を検出しており、何らかの建物があったと



第１図　調査地点位置図

1.第１・６地点(明智期推定大手)　2.第７地点　3.第３地点　4.第８地点
5.丹波八木城跡　6.伝内藤期大手口





第２図　主要調査地点平面図(注１文献［引原］挿図に加筆)

考えられる。また、この平坦地の北側斜面部で石垣の一部を検出した。角礫を用いた裏込めがなされている。仮に平坦地の面にまで積まれていたとすると、その高さは２ｍ以上となる。その上部には隅櫓などの建物があったことも推定される。

東側には、尾根の腹を「コ」字状に大規模に削り出して造成した広い平坦地がある。削り出した高さは最高３ｍ以上におよぶ。斜面裾には排水溝をめぐらす。排水溝には人頭大の礫が散乱しており、石組みがあったものと考えられる。平坦地の西隅部には、宝篋印塔の基礎を裏返して転用した礎石がある。このほかにも礎石と考えられる石があり、建物があったと思われる。

この地点からの出土遺物は比較的少なく、内容的には土師皿がそのほとんどである。この地点は全体的に小規模な山城の様想を示しており、日常的な生活の場ではなかったものと考えられる。

②第３地点

城山頂部から第７地点の西側に伸びる尾根の先端部に位置する。人工的に造成されたとみられる段々状の平坦地がある。調査地外の高所にも数段の平坦地がみとめられる。

この地点では、下半部の比較的広い平坦地部分に井戸などの遺構があり、出土遺物も多い。このような状況から、下半部においては、何らかの日常的な生活が行われていたものと考えられる。上半部以上については、第３地点と同様に防御拠点としての役割りを持っていたものとみられる。

なお、この地点の平坦地間の斜面部には石列が各所に残っている。それぞれの斜面には低い石垣があった可能性も考えられる。

③第１・６地点

第７地点と第３地点の間の谷部に位置する。第７地点寄りに広がる扇状地状地形の東半部にあたる。

この調査地の南辺に沿って東西方向に伸びる石垣を検出した。また、石垣の北側に広がる平坦地からは、井戸、方形石組土坑、貯蔵穴とみられる方形土坑などを検出した。出土遺物も多く、内容も多岐にわたる。このような状況から、この地点は屋敷地跡と考えられる。また、調査地北辺部では東西方向の溝状遺構を検出した。この溝状遺構は石垣とほぼ平行しており、これらの両遺構が屋敷地の南北を限るものと考えられ、その幅は約30ｍである。

溝状遺構は、西端部で南側に屈曲する。調査地南西側でも石垣に直交するような状況で盛り上り部分を検出しており、その東肩部には石列がみとめられる。この盛り上り部分の石列と溝状遺構の屈曲点を結んだラインが、屋敷地の西限にあたるものとみられ、その西

側は道路にあたると考えられる。この道路は、調査時点まで使用されていた里道とほぼ重なっている。道路については、樹木や通路確保などの関係上充分調査できなかったが、里道がこの調査地で検出した道路を踏襲している可能性は高い。

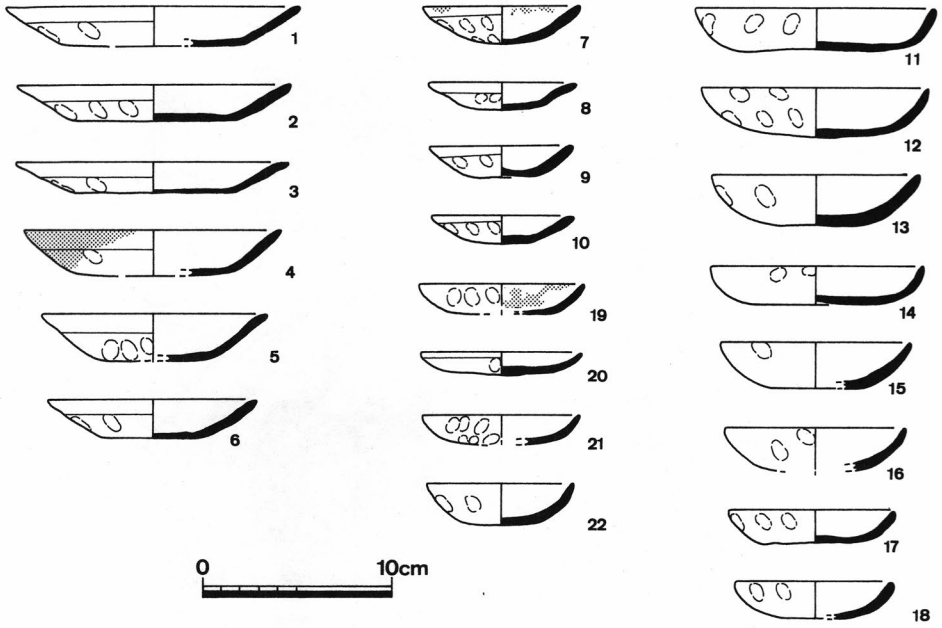
なお、屋敷地南辺の石垣は、築造当初には道路まではおよんでいないが、数回の造り替えがあり、最終的には道路にまで伸び、しかも塀などの基礎のような状況になる。ただ、道路と交差する部分には踏石状の偏平な大石があり、その北側に2段程度の階段状石列がみとめられる。このような状況から、その部分には門もしくはくぐり戸状の施設が推定され、通路としては機能していたものと考えられる。

④その他の地点

第1・6地点から里道をへだてた西側の第5地点では、土石流などで流されたためか明確な遺構は残っていなかった。しかし、日常の生活が行われていたことを示すような多彩な遺物が出土しており、第1・6地点を含めた周辺が屋敷地であったことが想定される。

第7地点の南東側約100mの第8地点では狭い谷部を埋め立てて段々状に造成した平坦地が残存していた。建物跡などの明確な遺構はみとめられず、出土遺物も土師皿がそのほとんどである。日常的な生活の痕跡はみられず、むしろ護岸施設とも考えられる。

第3地点の北西側でも試掘を行ったが、丹波八木城跡に関係するとみられる遺構・遺物はみとめられなかった。また、第7・第8地点間の山裾に所在する春日神社についても、



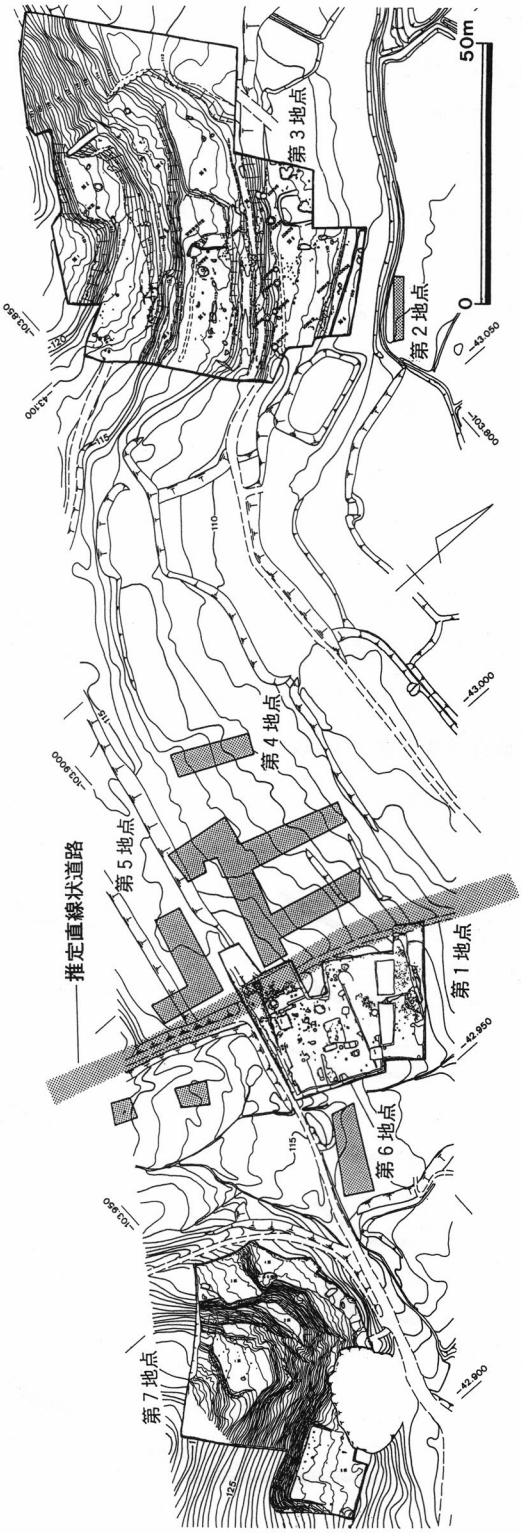
第3図　第1・6地点出土土師皿実測図(注1文献［引原］挿図から転載)

道路建設関連で移転した跡地を調査したが、江戸時代の整地層を確認したのみである。

⑤出土遺物

この調査では、土器・陶磁器をはじめ、石製品、金属製品、木製品などが出土した。なかでも、土器・陶磁器は、出土遺物の大部分を占める。最も多いのは土器で、その中でも土師皿が多数を占める。土師皿には、京都系のものといわゆる在地系のものがあり、在地系のものの中には脚付のものがある。陶磁器には、国産のものと中国製のものがある。

土器・陶磁器の年代観は、さまざまである。その中で最も出土数の多い土師皿について、特に京都系のものでみれば、永禄11(1568)年の織田信長入京の頃およびそれ以後に比定されるものが多い[注2]。これは、どの調査地点の土師皿でも同様である。16世紀後半から末頃にかけての時期であり、内藤氏丹波八木城落城の前後およびそれ以降にあたる。それ以前の、例えば15世紀に遡るような土師皿は、ほとんど見当らない。中国製磁器では15世紀から16世紀中葉頃のものが目立ち、土師皿の年代観とは



第４図　調査地全体図(注１文献［引原］挿図に加筆)

合わない点もあるが、これは使い捨てするものではないことによるのであろう。

⑥小結

この調査結果からみると、明確な遺構の分布する範囲は、第３地点の所在する尾根と第７地点の所在する尾根、およびそれらの尾根の間の第１・６地点などの所在する谷部と言える。第１・６地点北側のさらに下方でも八木町教育委員会の調査によって井戸状の遺構が確認されており[注3]、南側の谷奥部にも段々状の平坦地がみられ、この谷一帯に屋敷地群が広がっていたことが推定される。

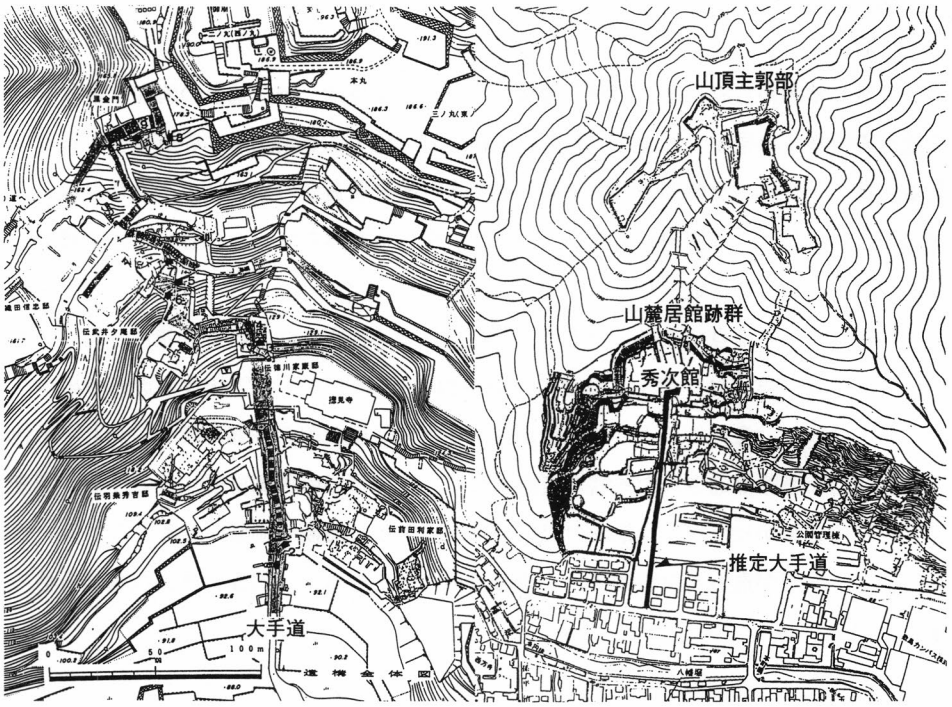
先に、第１・６地点で検出した道路は現代の里道に踏襲されている可能性が高いことを指適した。この里道は、第１・６地点の前後約100mにわたって扇状地状地形の扇央部に直線的に伸びている。このような状況から、２本の尾根の間の谷部に設けられた屋敷地の中に直線的な道路が通された景観が復原される。この道路の西側肩部については、調査では明確にできなかったが、現地形の起伏からみて約５m前後の道路幅と考えられる。また、このような景観が造られた時期は、土師皿の年代観からみて、内藤氏丹波八木城落城の前後と考えられる。

３．景観の類例

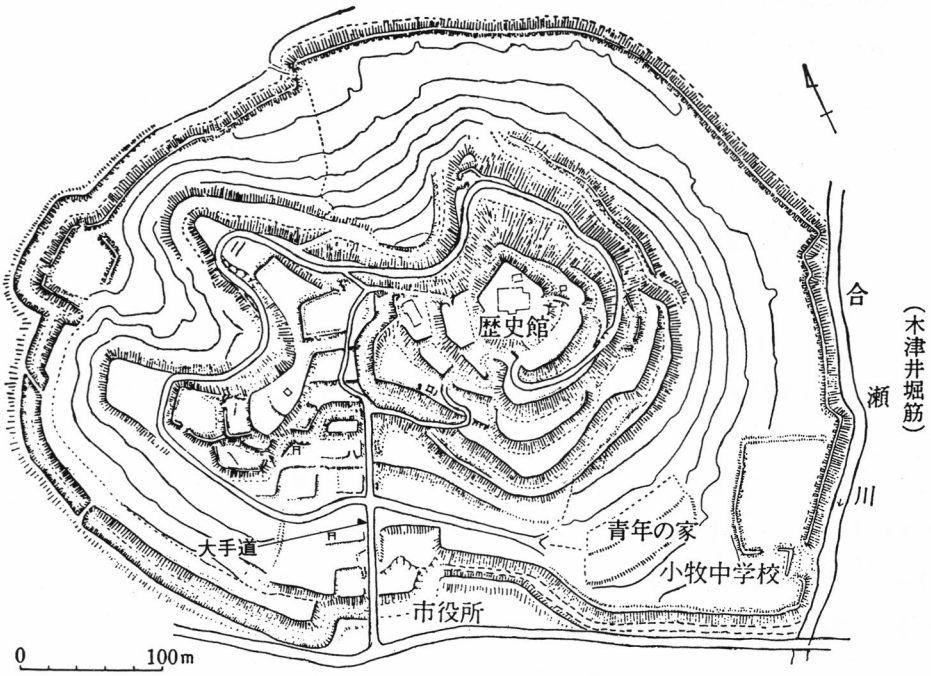
谷部に屋敷地を設け、その中に直線的な道路を通す例としては、滋賀県蒲生郡安土町の安土城跡、愛知県小牧市の小牧山城跡、滋賀県近江八幡市の八幡山城跡があげられる。

安土城は、言うまでもなく、織田信長によって築城された。天正４(1576)年に起工され、天正10(1582)年の本能寺の変直後に焼失している。近年、安土山南麓の大手周辺が発掘調査されている。小尾根の間の谷部に設けられた伝羽柴秀吉邸・伝前田利家邸・伝徳川家康邸などと称される屋敷跡群の中に、約130mにおよぶ直線状の大手道が敷設された状況が確認されている[注4]。

小牧山城は、永禄６(1563)年に、美濃攻略を目指す織田信長によって築城され、信長は清須からこの城に移ったといわれる。永禄10(1567)年には、斎藤龍興の居城稲葉山城を落として美濃を攻略し、信長は稲葉山城へ移ったため、小牧山城は廃城となった。その後、天正12(1584)年に、信長亡き後に天下統一を目指す羽柴秀吉と、信長の二男織田信雄が徳川家康を誘って対待した小牧長久手の役の時に、小牧山城は信雄・家康方の本陣として改修された。この小牧山城跡南側の小尾根の間の谷部に、直線状に伸びる道路がみとめられる[注5]。小牧山城跡南麓には、信長が清須から移した城下町があったという説もあり、信長によって大手道として造られた可能性もある。もしそうであれば、安土城の原形とも言える。また、信雄によって造られたとすれば、安土城に似た景観を造ることによって信長の



安土城跡（注４文献挿図に加筆）　　八幡山城跡（注６文献挿図に加筆）



小牧山城跡（注５文献挿図に加筆）

第５図　類例城郭図

跡を継ぐ者であることを示そうとしたとも考えられる。いずれにしても、信長に直接関連するもの、あるいは関連させようとする意図があるものとみられる。

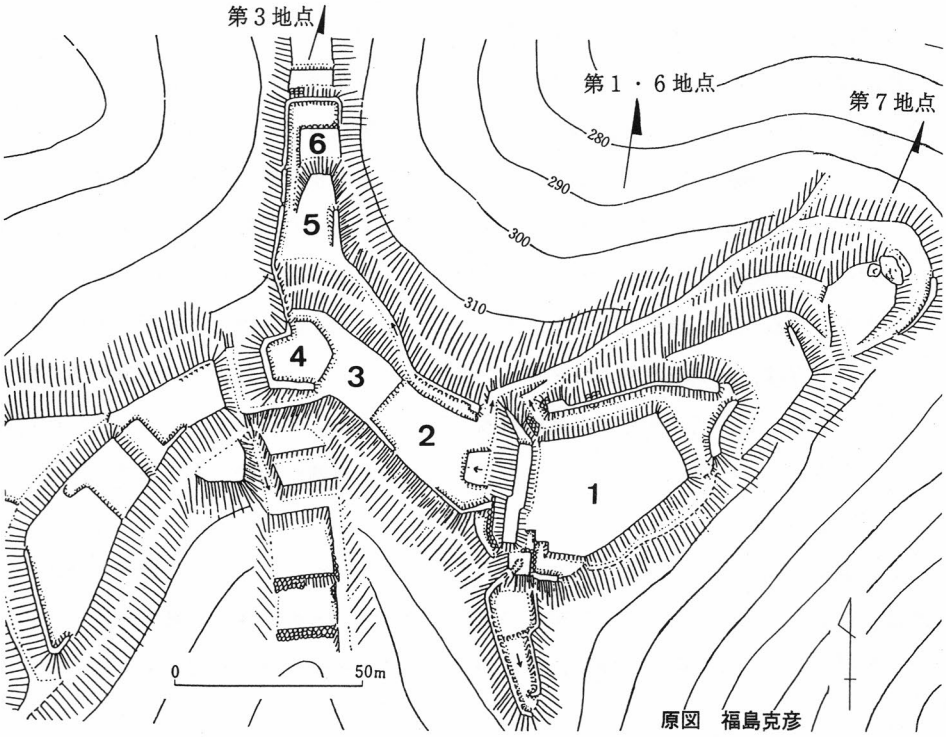
八幡山城は、天正13(1585)年に羽柴秀吉の命により羽柴秀次によって築城された。その後城主は変わるが、文禄4(1595)年の秀次自刃に伴い破却されたといわれる。山頂に高石垣をめぐらした山城跡があり、そこから二方向に伸びる尾根の間の谷部に屋敷地群が想定されている。谷の最奥部には秀次館と呼ばれる高石垣を用いた館跡があり、麓から館跡に向って約230mの直線状大手道が推定されている。(注6) この城の築城時期は、小牧長久手の役で羽柴秀吉がかろうじて勝者となり天下人としての第一歩を踏み出した時期にあたる。八幡山城の城下町は、安土城の城下町を移したものという。いまだ織田氏の印象が濃く残っていた近江において、城郭部も安土城の景観に似せて造ることにより、羽柴(豊臣)氏が織田氏の後継であることを示そうとしたとも考えられる。八幡山城跡にも、信長と関連させようとする意図が感じられる。

以上、筆者の浅学のため三例しかあげることができなかった。これらの城跡に共通することは、谷部を大手とし、そこに直線状の道路を敷設し、屋敷地群を形成することである。また、直接的あるいは間接的に織田信長との関連が考えられる点でも共通する。

4．丹波八木城跡の検討

福島克彦氏は、丹波八木城の山城部分について、明智氏の改修を指適されている。(注7) 主郭に手を加え、その周辺の郭を土塁によって区画し、北方向に開口するように「コ」字状に郭が連なる箇所を明智氏の使用部分とされる。この「コ」字状に連なる郭の延長をそれぞれ尾根線沿いに下方へ追って行くと、第3地点と第7地点に至る。明智氏丹波八木城は、調査地点の位置する本郷地区側を意識している様子である。このようにみると、山頂から山麓にかけて想定される2本のラインの間に位置する第1・6地点付近は、明智氏丹波八木城の正面＝大手にあたるものと考えられる。現在の里道に踏襲されているとみられる直線状の道路は、直線状の大手道とも考えられる。このような状況は、ほぼ、前記三例と共通する。

土師皿の年代観からは、内藤氏末期に明智光秀の侵攻に備えるため、内藤氏によって行われた造作という見方もできる。しかし、調査結果から復原される景観は、織田信長関連の城郭に近いものである。反信長側であったといわれる内藤氏が、そのような形態の城郭を造るとは考えにくい。したがって、この調査で検出した状況は、明智氏によって造られたと見る方が妥当であろう。内藤氏の時期にも山城への出入口として城戸などはあった可能性があるが、調査結果からみれば、そこに屋敷地群などが形成されていた可能性はきわ



第６図　山城部縄張図（注７文献挿図に加筆。1～6が明智期の推定使用部）

めて薄い。中井均氏は、織豊系城郭の三つの要素として、礎石建物・瓦・石垣をあげられている。(注8) この調査では、瓦の出土はなかったものの、礎石建物と石垣については第７地点などで検出している。山城部分は未調査のためくわしいことは不明であるが、明智氏の改修を指適されている主郭部分には石垣が用いられている。この調査で検出した状況は、織豊系城郭としての丹波八木城の一側面を示すものと言える。

丹波八木城は、内藤氏末期頃には丹波一帯の実質的な支配拠点でもなく、名目的な守護代の城であったとしても、経過的には室町幕府権力を背景にした守護代権力の象徴であり、少なくとも南丹波では有数の拠点的城郭である。このような城であるからこそ、その改修には大きな意議があると考えられる。堀田浩之氏は「城郭の姿がそのまま、城主の政治的地位や新しい統治の形を表現した」と指適されている。(注9) 明智氏も、丹波八木城を改修して安土城に似た景観を造り出すことによって、支配者や支配権力の交替を表現しようとしたものと考えられる。これが、明智氏の自発的な意図によるものか、織田信長の指示によるものかは不明である。また、明智光秀は、羽柴秀吉の長浜城などと同じく、安土城と水上で直結している琵琶湖畔に坂本城を与えられている。単なる信長の属将というだけでなく、側近としても信頼が厚かったものとみられる。信長の信頼を背景に、特権として安土城に

似た城郭を許されたという見方もできよう。

内藤氏丹波八木城を描いたとされる古図では、旧山陰道に面した亀岡市側に大手口が記されている。明智氏丹波八木城は、方向的にはほぼ反対になる八木町本郷地区を大手として意識している。これは、大堰川の水上交通路をおさえる意味もあろうとは思われるが、それとともに、山頂から山麓までを間近かに望める位置であり、視覚的効果が最も大きいという点もあろう。

5．終りに

この調査では、明智氏丹波八木城の一部を検出したのではないか、という結果になってしまった。しかし、調査地が所在する八木町本郷地区に内藤氏丹波八木城の痕跡がないというわけではない。本郷地区の北側に伸びる尾根の南麓には、丹波守護細川勝元の創建といわれる龍興寺があり、内藤氏頃にも何らかの施設があった可能性はある。調査地周辺は、居住地としては決して良いとは言えない。冬期には午後２時30分を過ぎる頃には南側にそびえる城山のため日没状態になり冷え込む。また谷部であるため湧水も多く湿気も高い。むしろ、龍興寺の位置する尾根南麓の方が居住には適していると思われる。丹波八木城跡については、山地部分だけでなく範囲を広げてとらえる必要がある。

この調査では、丹波八木城跡のほんの一部にふれたにすぎない。内藤氏の時期の様相については、具体的には何もわかっていないというのが現状である。しかし、丹波八木城跡と言えば内藤氏、とストレートに考えられがちであったが、やはり、ちがう視点でとらえることも必要であろう。丹波に所在する中世山城跡の中のいくつかについては、明智氏による改修が行われていることが指適されている。(注10) 留意すべきであろう。

最後になったが、丹波八木城跡の調査中より多くの方々からご指導・ご教示をいただいた。(注11) 謝意を表したい。

（ひきはら・しげはる＝当センター調査第２課調査３係主任調査員）

注１　柴暁彦ほか「国道９号バイパス関係遺跡平成３年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第51冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1993
引原茂治ほか「国道478号バイパス関係遺跡平成５年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第62冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

注２　平良泰久ほか「平安京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1980年第３分冊　京都府教育委員会）　1980

注３　谷口悌『八木城跡発掘調査概要』（『八木町文化財調査報告書』第１集　八木町教育委員会）1994

注４　『開館記念シンポジウム「織田信長と安土城」報告書』　滋賀県立安土城考古博物館　1994
『特別史跡安土城跡発掘調査報告２』　滋賀県教育委員会　1992

注５　『日本城郭大系』第９巻　新人物往来社　1979
『戦国の城　近世の城』　新人物往来社　1995

注６　『八幡山城遺跡現地説明会資料』　近江八幡市教育委員会　1993

注７　福島克彦「織豊系城郭の地域的展開―明智光秀の丹波支配と城郭―」（『中世城郭研究論集』新人物往来社）　1990

注８　中井均「織豊系城郭の画期―礎石建物・瓦・石垣の出現―」（『中世城郭研究論集』　新人物往来社）　1990

注９　堀田浩之「城郭の空間特性と表現手法に関する一考察」（『塵界』第八号　兵庫県立歴史博物館）　1995

注10　注７に同じ

注11　最後になりましたが、記して感謝いたします。
伊野近富、岩崎直也、上田正昭、黒川孝宏、玉井哲雄、中井均、中澤勝、永光尚、広瀬二郎、福島克彦、堀内明博、村田修三、森島康雄、若江茂　（敬称略）

参考文献

１．竹岡林、今谷明ほか『丹波笑路城発掘調査報告書』（『亀岡市文化財調査報告書』第７集　亀岡市教育委員会）　1978

２．『郷土誌八木』第５号　八木史談会　1992